

1. はじめに

特殊教育諸学校に特に設けられている教育課程として「自立活動」がある。本学では聾学校の教員を目指す学生のための授業科目として「聴覚障害自立活動」を用意している。筆者はその授業を担当していて、授業内容の一部で「聴覚障害の理解」を取り上げている。聴覚障害の理解は、聴覚障害児と係わるひとにとっても聴覚障害児自身にとっても必要なものである。さまざま視点から聴覚障害への理解を深めることができるが、聴覚障害を的確に理解することは容易ではないとも言える。ここでは「聴覚障害の理解」教材として制作されたビデオの内容を紹介する。

2. 2つの作品の紹介

1) じんくんと補聴器

ストーリー構成は以下のようにになっている。

<オープニング：「じんくんと補聴器」のタイトルと手描きイラスト>

<聴覚障害児じんくんの紹介>

「私たちはいろんな音に囲まれている いえの中で 街の中で」

「じんくんはこんな大きな音でないと聞こえないんだ」

「聞こえないことで困ったり危険なことがある」

「車が近づいてきても聞こえない」「駅のアナウンスが聞こえない」

<聞こえないことを補う器械：補聴器>

「いろいろな種類の補聴器」

<音はどんなふうに耳に入って伝わるのだろう：私たちの耳のしくみ>

「音が耳から入って脳まで伝わって聞こえたとわかるのだ」

<補聴器のはたらき>

「補聴器をつけてみるといろんな音が大きく聞こえる」

「聞こえなかった音が聞こえるようになって役立つけれど万能ではない」

「テレビを見てみよう」

「静かなところで見るとテレビとざわざわしたところで見るとテレビ」

「まわりが静かでなければテレビの音は聞き取れないよ」

<補聴器をつけている友だちとの接し方・話し方>

「あいての前に立って、はっきり話しましょう」

「うまく伝わらないときは、紙にかいてみましょう」

「みみもとでさわぐのはやめましょう」

「補聴器で遊ぶのはやめましょう」

< 教室の中の雑音を小さくする工夫：テニスボールの活用 >

「椅子の脚に使い古しのテニスボールをつけるとこんなに静かになるよ」

< エンディング：参考図書を紹介 >

ビデオ画面は、オリジナルに作った手描きのイラストと、参考書として取りあげた「障害を知る本：耳の不自由な子ども達」から引用した写真やイラストから主に構成され、雑音下のテレビとテニスボール場面は現場をビデオ撮影したものが組み込まれている。

2) 遠慮しないで助けてあげよう、遠慮しないで助けてもらおう

構成は以下のようになっている。

< 歌「明日があるさ」の歌詞提示：音声なし、音楽なし >

< 5名の学生による「明日があるさ」手話付身体パフォーマンス >

5名の中に聞こえない学生 T が含まれている。音楽に合わせて5名揃って軽快に踊る。

< 聞こえない学生 T の自己紹介とストーリーの導入 >

音声なし文字提示

T の手話による語りかけ：音声なし、字幕なし

T の手話による語りかけ：音声通訳つきで再提示、字幕なし

自分の名前、耳が聞こえないことを紹介。

「友達とのやり取り、耳が聞こえなくとも気持ちがあれば通じ合えるよ」

「友達がサッカーを一緒にしようと誘っている場面を見て欲しい。」

< 「サッカーしようよ」場面 1：肩をたたいて呼ぼう（イラスト提示） >

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 M が背後から「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は気がつかない。M が肩をたたいて気づく。ふたり一緒に出かける。

< 「サッカーしようよ」場面 2：ゆっくり話そう（イラスト提示） >

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 F が肩をたたいて「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は話しが読みとれない。F がはっきりした口形でゆっくりと「サッカーしようよ」と言う。ふたり一緒に出かける。

< 「サッカーしようよ」場面 3：書いて伝えよう（イラスト提示） >

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 N が隣に座って「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は話しが読みとれない。N は紙を取り出し「サッカーしようよ」と書く。ふたり一緒に出かける。

< 「サッカーしようよ」場面 4：みぶりで伝えよう（イラスト提示）>

シナリオを文字提示

やり取りの実演：T が本を読んでいる。友達 O が肩をたたいて「サッカーしようよ」と音声で誘う。でも、T は話しが読みとれない。O がボールを蹴る動作をしながら「サッカーしようよ」と言う。ふたり一緒に出かける。

< 復習しよう：遠慮しないで助けてあげよう、遠慮しないで助けてもらおう >

場面 1 から 4 までの標語を、聞こえない学生は手話で、聞こえる学生は音声で、イラストを提示しながら、交互に繰り返す；

T：「肩をたたいて教えてもらおう」、M：「肩をたたいて呼ぼう」

T：「ゆっくり話してもらおう」、F：「ゆっくり話そう」

T：「紙にかいて教えてもらおう」、N：「書いて伝えよう」

T：「みぶりで教えてもらおう」、O：「みぶりで伝えよう」

< T からのメッセージ >

聞こえなくとも色々な方法で通じ合うことができる。「聞こえなくてかわいそう」思う人もいるかもしれないけれど、僕は聞こえなくてよかったです。その方が自分らしいからです。メガネをかけているひと、足が速いひと、絵が上手なひと、皆それぞれ個性をもっているでしょう。それと同じように聞こえないのも一つの個性です。

字幕で提示：音声なし

T が手話で語りかける：音声通訳付

< エンディング：「明日があるさ」の音楽 >

3. 筆者の解説と感想

2 つの作品とも素朴なできあがりだが、よくできている。学生は聴覚障害に関心を持っているので真剣に取り組んで作った。授業で「聴覚障害の理解」についてまず講義をするが、受け身で聞いているのと、小学校児童を対象として教材を作るように課題を与えられてそれに取り組むのとはまるで違う。

「じんくんと補聴器」ははじめてのビデオ教材作成であった。この作品はビデオを見る対象が聞こえる小学校高学年児童であると想定している。彼らに聴覚障害児が使っている補聴器がいかに大切なものであるか。また同時に、

補聴器をつけていても決してみんなと同じように聞こえるようになるわけではないから、こんなことに気をつけて接して欲しいと伝えている。オーソドックスな作り方をしていると言える。イラストをはっきりしたタッチで明るい色づかいで描かれているなどの工夫がなされているので子ども達もしっかりと見てくれる作品に仕上がっていると思われる。

「遠慮しないで助けてあげよう、遠慮しないで助けてもらおう」は、第1作を見てもらって、第2作目の作品として位置づけた。この作品の特徴は3つある。ひとつ目は、見てもらう対象を聞こえる児童とともに聞こえない児童も想定していること。むしろ聞こえない児童が主たる目当てになっている。2つ目はメッセージを手話と文字と音声で送っていること。3つ目は聞こえないひとがリズムカルなパフォーマンスで音楽を表現していることである。

聴覚障害児が通常の学校や学級で学んでいる場合、彼らは同じような障害を持っている仲間や先輩、大人に出会うことが少ない。この作品では聞こえない学生にメッセージを語らせている。これは聞こえる子どもたちだけでなく、聞こえない子どもたちに手話での語りかけを見てほしいという願いがある。通常の学級で学んでいる聴覚障害児はほとんどが音声言語でコミュニケーションをとっており、手話を知らない児童の方が多いかもしれない。しかし敢えて手話で語ってもらっている。聞こえない成人が使っているごく普通に使っている手話を見てほしい。すてきな表現手段だと感じ取ってほしいと願っているように思える。また、オープニングでの「明日があるさ」のパフォーマンスは、聞こえる学生をリードする形で聞こえない学生が音楽に合わせてリズムカルに踊っている。聞こえない人たちが楽しめる音楽はこういうものなのかもしれないと実感させてくれる。

4. まとめ

第1作目は聞こえる子ども達に目を向け「聴覚障害児を正しく理解して適切な援助をしよう」と呼びかけている。第2作目では、「遠慮しないで助けてもらってもいいんだよ」「遠慮しないで助けてやっていいんだよ」と双方に呼びかけ、ずいぶん歩み寄った雰囲気がつくられている。実際に子ども達にこの順序で見せるのがよいと思う。そして3作目が欲しくなった。筆者自身がこの2作を通して、「障害を理解して支援する方法を知ると考えるのは間違っていないのか」「障害ある児童が助けられる側、そうではない児童は助ける側としてと設定して果たしてよかったのか」と自問した。今度作られる第3作目では、聞こえない子どもが当たり前に自分たちの仲間として活動している姿を是非見てみたい。